

新任 挨拶

■ 所長 小瀧 潔



このたび、内水面水産研究所長に着任しました小瀧と申します。生まれは東京都港区で、昭和57年に入庁し、この年に設立された勝浦市の県栽培漁業センター(現、種苗生産研究所勝浦生産開発室)で、主にヒラメの種苗生産を4年ほど担当・格闘し、その後、水産行政を渡り歩いて、25年ぶりに研究機関に戻ってまいりました。

当研究所は印旛沼のほとり、佐倉市内の船戸大橋そばにあります。県では明治時代後半から内水面の試験・研究・調査を行ってきましたが、昭和40年8月から現在の場所で、内水面単独での業務を始めました。

県内では利根川・養老川・夷隅川・栗山川や印旛沼・手賀沼など14の川や沼で、漁業権の免許を受けた漁業協同組合の皆さんがフナ、コイなどを採捕し、私たちの食卓においしい食材を提供しています。これらの組合では漁業法に基づき稚魚の放流や産卵場の造成などの増殖行為を行っており、さらに、県民の皆さんに釣りを楽しんでもらうための遊漁規則を設け、アユやワカサギなどの放流も行っています。

また、県内ではウナギ・ナマズ・アユなどの養殖が北総地域他で、そして、アオノリ養殖が夷隅・九十九里地域で行われており、平成20年の内水面漁業・養殖業の生産量は451トンになっています(千葉農林水産統計年報)。さらに、当研究所の研究成果を活かし、近年では市原・久留里地区でホンモロコ養殖も開始されています。

千葉県は昭和50年代半ばまで、内水面漁業・養殖業の生産量は1万トンを超えていましたが、その後減少し続けました。この大きな要因として、川や沼の水質悪化や水辺植物の衰退、カワウや外来魚など害敵の増加、冷水病など魚の病気の発生等、県内の内水面漁業・養殖業を取り巻く環境が厳しくなっていることが考えられます。川や沼の景観やそこに棲む生き物に親しみ、釣りを楽しむ皆さんにとっても、厳しい環境をこのまま次世代に引き渡すことはとても残念なことと思います。

そこで、当研究所では、川や沼の漁場環境の保全、有用魚介類の維持増大とその持続的利用、養殖技術の高度化・疾病対策の3つに重点を置いた技術開発に努め、漁業・養殖業を営む皆さんのお役に立てればと考えています。さらに、植生の再生など川や沼の生態系

保全による在来生物の保護増殖等、内水面が持つ多面的な機能の発揮により、県民の皆さんの暮らしを豊かに、そして健やかにできるようなお手伝いできればと思っています。

今後とも、関係機関・各位と密に連携し、業務を行ってまいりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 内水面水産研究所を振り返って

### ■ 前所長 鈴木 和良

地球温暖化が叫ばれて久しくなりますが、このところの不安定な天候には、この先の状況がどうなることやらと、皆様も心配されていることと思います。

さて、私事ではありますが、この度、県の人事異動により内水面水産研究所を離れ、4月1日から(財)千葉県水産振興公社の役員の一員として、千葉県水産業の振興に、微力ながらお手伝いさせていただくこととなりました。



水産研究所に着任したのが去年の4月で、それも県職員に採用されて以来 26年ぶりの研究職で、「研究者としての感覚を発揮？」できるわけもなく、只々漁業者や生産者の方々のご協力と、職員の働きのお陰もあって「あっという間に過ぎた1年」と感じているところです。

このところ、内水面では、KHVDや冷水病の発生、ウチダザリガニの確認、シラスウナギの不漁など、歓迎できない話題が目につきますが、ここで、東京大学の日野名誉教授が言われた言葉を抜粋して記します。

「漁業は、野生生物を漁獲するという特徴から、(湖沼学でいう)調和のとれた健全な生態系でのみ、持続性のあるものであり、漁業の成立はとりもなおさず、自然生態系が健全であることと表裏一体を成すものである。」

この言葉が示すように、内水面は海面以上に水域環境や社会環境の変化・影響を受けやすいことは言うまでもありません。であればこそ、そこを生活の場とされている漁業や生産に携わる方々の、常日頃からの取り組みが、例え地道ではあっても最も大切なことと思っております。

期待しています。

僅か、1年という短い間でしたが、たいへんお世話になりましたこと、感謝申し上げます。

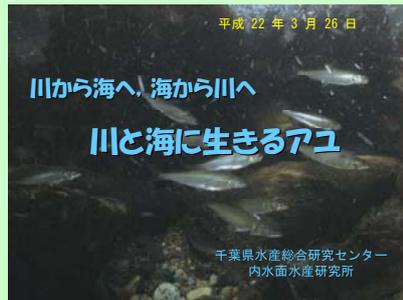
最後に、今後の内水面漁業、養殖業の発展を祈念し、また、内水面水産研究所への暖かいご支援、お叱りをお願いし、文章整いませんが退任の挨拶に代えさせていただきます。

# ■好評を博した漁業者のためのアユ講演会！

3月26日、県内の湊川漁業協同組合からアユの生態について勉強がしたい旨の要望があり、実際にアユ漁に従事されている15名の方々が来所され、当研究所職員による「川と海に生きるアユ」と題した講演会を、下記のスライド資料をもとに実施しました。



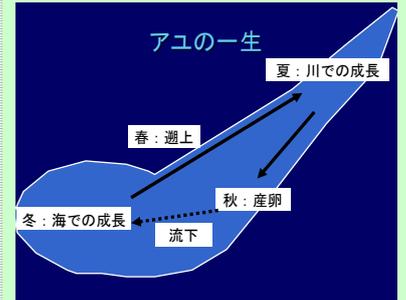
## ●講演資料



### アユ

- ・秋に川で生まれたアユは、海へ下る
- ・海へ出たアユは、春に川を遡上する
- ・遡上したアユは、コケを食べて川で育つ
- ・秋になると、産卵して一生を終える

川から海へ、海から川へ、アユには、豊かな流れを生み出す森と、川、海が必要



### アユの産卵場

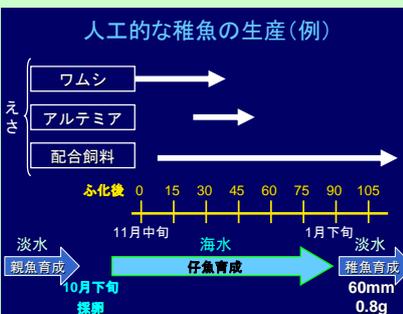
流速30~50cm、水深5~50cmの砂礫場で産卵する流量が少ないと、良い産卵場にならない

### 湊川での産卵場整備

湊川は天然稚アユの遡上が可能なので、産卵場の機能を十分に働かせる。

漁協組合員による産卵場整備

(推定産卵量約3,500万粒)  
(推定遡上尾数3~17.7万尾)



### 湊川由来種苗(F1)の特性

1. 成長は今まで生産していた種苗と変わらない。
2. 冷水病に対する耐性はこれまでの種苗より高い。
3. 産卵時期はこれまでの種苗より遅く、長期間になる。

平成21年度はF1を親として、湊川由来種苗の生産を行った。



湊川は東京湾に河口（富津市）を持ち、千葉県内を流れる推定延長約 48km の、天然のアユが遡上する河川の一つです。

春、天然稚アユが遡上し、夏、川で石に付着する藻類を食べて成長したアユは、秋、産卵し、生まれた子供（仔魚）たちは海へ降って行きます。

アユは寿命が1年の魚で、多くのアユは秋に産卵した後、死んでしまいますが、その命は次世代の子供達に受け継がれていきます。

湊川ではアユ漁に携わる漁師さんたちが、アユ資源を守るため、産卵場の整備や、稚アユが遡上する魚道の整備などに力を注いでいます。